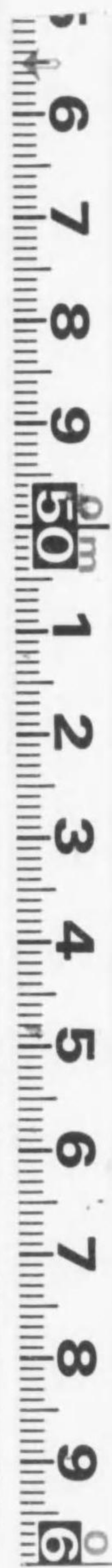


特 259

454

菅原時保禪師

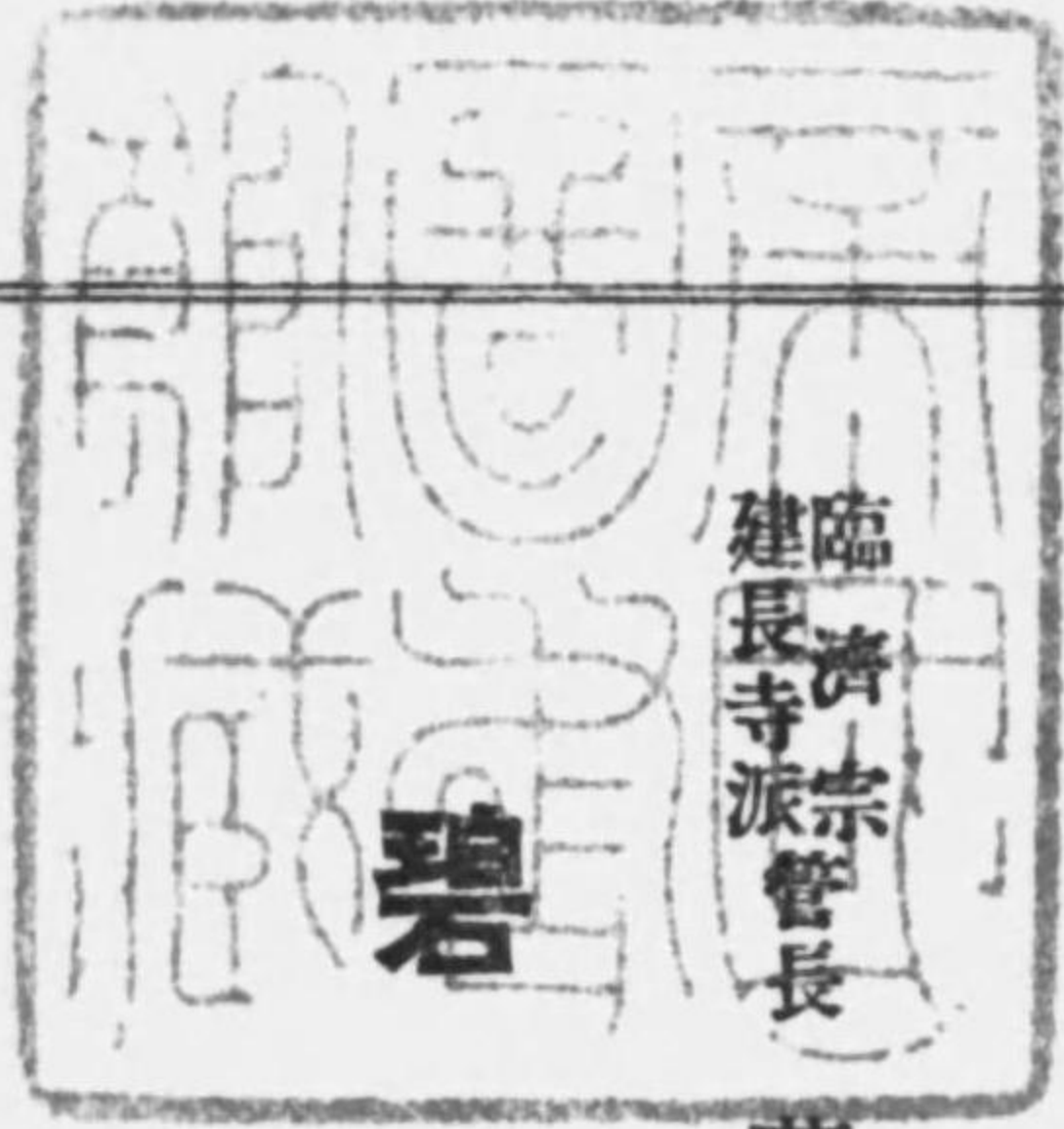
碧巖錄講演 (其三)



始



特 259  
454



臨濟宗  
建長寺派管長

菅原時保禪師

巖錄講演

(其三)



### 碧巖錄提講

禪は門外の人の、お考へになる様な一種不可思議、奇々妙々なる者ではありません。實際底であり、現成底であります。(私は馬鹿の一つおぼえて、禪の話となるご毎度同じことを繰り返しかへします、今回も亦復然りであります。)

禪の本領、禪の實體、禪の本分、禪の面目、禪の事實、そのものは暫く措きます。(語る能はず示す能はず。)私をして禪そのもの、一端を忌憚なく語らしめば、曰く、禪の始めは自己にいて、禪の終りは自己、自己を外にして、禪なく、禪を外にして自

己なし、」であります。云ひ換へますれば、禪は徹頭徹尾自己、自己は徹頭的禪、——禪は自己の始終にして、自己は禪の始終なりと断定致します。」説似一物即不中。——

自己には、小なる自己と、大なる自己があります。小なる自己に沈溺すれば禪の害物となり、大なる自己を活用すれば禪の大益となります。尤も宇宙萬象の眞理實相が、そのまゝ禪である、故に禪は宇宙萬象の總てに體達する、それであること云ふ立場から云へば、所謂、無喜無憂でありますから、害の益のこと云ふことも無用であります。されど、天地と別れ、日月と別れ、山川草木と別れ、君臣と別れ、父子と別れ、夫婦と別れ、別れ

別れたる今日、害は我れ人の尤も嫌ふ處にして益は自他の共に愛する處であります。然らば害を去りて益を増す禪こそ賞翫すべきものにして又研究もし修養もなすべきであります。(人間萬事然らざるはなし。) 諸君、試みに私が語ります自己即禪なりと云ふ所以を聞きたまへ、無論小なる自己ではありません。

自己には肉と靈とがあります。自己即禪とは、靈を以て云ふか、肉を以て云ふか、なぞと書生論を振り廻はすことは御無用に願ひます。——私は身心不二、心身脱落、脱落心身の處から申し上げます。

自己を生ずるものは自己也、自己を殺すものは自己也、自己を縛するものは自己也、自己を脱するものは自己也、自己を迷はすものは自己也、自己を悟らすものは自己也、自己を苦しむるものは自己也、自己を楽しましむるものは自己也、自己を悲しましむるものは自己也、自己を喜ばしむるものは自己也、泣くも自己也、笑ふも自己也、起きるも臥するも、立つも坐するも、呑むも吐くも、總て是自己也、要するに一切の萬事萬法は自己に依りて存在し、而して自己は一切の萬事萬法をして光明を輝かしむるものであります。」之是が自己即禪なりと云ふ所以であります。故に大自己そのもの、立脚地を確實にせざるべからず、

是非とも堅固になさざるべからず、堅固になすべし確實になすべし。

禪は黙に宜しくして語るに宜しからずと云ふそれは法界理地一塵を立せずと云ふ本領からのこと。」

禪は語るに宜しくして黙に宜しからずと云ふそれは佛事門中一法を捨てずと云ふ當體からのこと。」

大惠禪師の碧巖録を焼却なされしは、法界理地一塵を立てずと云ふ立場から、黙に宜しくして語るに宜しからずと云ふ主義であります。(彼も一時)

圓悟禪師の碧巖録を執筆なされしは、佛事門中一法を捨てず

と云ふ立脚から、語るに宜しくして黙に宜しからずと云ふ黨派  
であります。(是も一時)

是と云へば何れも是、——非と云へば何れも非、——と  
は云ふものゝ、大惠禪師、圓悟禪師、各々自己の手腕にまかせ、  
同じく少林の無孔笛を把つて、一箇は逆風に吹き、一箇は順風  
に吹く、概があります。私は、自己の管見に任せ、永嘉大師の、  
行亦禪、坐亦禪、語默動靜亦復禪なりと云ふ、その共鳴者であ  
ります。故に黙とも定めず、説とも定めず、臨機應變、或は法  
界理地不立一塵、或は佛事門中不捨一法、隨處隨時、語るべき  
時には語り、黙すべき時には黙し、動すべき時には動じ、靜か

なるべき時には靜かに、——向上、向下、唯他、唯自、箇々  
轉處に立在し而して立處皆眞なり、と斯くなりたきものと思  
ひ、斯くならねばならぬと思ふこと茲に七十年、未だに初志の  
如くになりません。そのなる能はざる理由は、麻の如く粟に似  
て山の如くあります。就中、門より入るものは家珍に非ず、そ  
れが第一の理由であります。

私は事實の愚僧、年こそ七十歳になりましたが、修行と云ひ  
經驗と云ひ、學問と云ひ見聞と云ひ、總てに於て未熟どころか  
全然ゼロであります。尤も幼年より只今の老年になるまで、多  
少修行も學問も經驗も見聞も、積むことは積みました。されど、

只積みにつけりて、寸毫も得る處はありません。一切門外より入るものにして自己の胸襟より一箇半箇も出現したものはありません。故に口舌を以て談論する處は悉く古聖の糟粕、——手足を以て動作する處は皆先賢の行跡のみ。——聞く、耳目で見聞したる、そのまゝを口で説く是を口耳四寸の學者と云ふ。私は、それ以上の無學者、目で見たまゝ目で説き、耳で聞いたまゝ耳で説くと云ふ四寸處か一寸一分もなき無學者中の大無學者であります。故に私の云爲行動、悉く舊式ならざるはなし、總て無風流ならざるなし。鸚鵡に非ざれば九官鳥、——猿に非ざれば馬鹿鳥、——徹頭徹尾、——人様のまねのみ。未

だ曾て先人未發の新言語を吐露し、先輩未行の新行動をなしたるここ一回も一度もあることなし。實に慚愧々々、——洵に残念々々。——

常に古人先輩及び現代人の文章又は講演、其他起居動作の總てを拜見致しますること、何れも金科に非ざれば玉章、聖行に非ざれば賢動、——實に浦山敷く且つ恐れ入る次第であります。元より私如き至愚、極拙の鈍漢は、語らずして黙し、動ぜずして坐すべきが、其分にして、それが本當であります。

されど、僧中の禪僧と云ふ名の下に、小なりと雖ごも一派の管長と云ふからには、提唱もなすべし入室も聞くべし、それが

本業であり、それが職務である。若し本業を怠り職務を努めざれば、第一に管長を退職し併せて僧籍も脱し並に人間も廢業すべし、と云ふことになります。故に止むことを得ず鐵面をかぶり、愧のうはぬりを忘れ、外見も何も一切千萬里外に放下し、放送室中、——無人の所で放送する心にて碧巖録を提講致します。

抑々碧巖録、そのものゝ成立は、本文が第一位、第二位が頌、第三位が垂示及び着語並に評唱であります。(只今は着語と評唱は略します。)されど碧巖録を提講致します時は、第三位の垂示が始めで、次が本則、終りが頌と云ふ順序になります。故に私

も碧巖録を提講致します其順序は圓悟禪師の垂示より拜講を始めます。——苟も碧巖録を提講致しまするには、垂示なされた圓悟禪師、——頌を添へられた雪竇禪師、——其人の行履、省略中の省略たりとも申し上げなければ、何ごなく道具が不足して居る様に思はれます故に兩禪師のここを極めて簡単に述べさせて頂きます。」聞く處に依りますれば、雪竇禪師が百則の公案に頌を作られたのが元で、其後門人の遠塵和尚が集録して雪竇禪師頌古集と名づけ是を刊行し、其後更に二百年程たつて圓悟禪師が張無盡居士の請に應じて各則に垂示と評唱、並に着語を加へられたとあります。今日お互が用ひて居ります碧



巖録がそれであります。

雪竇禪師は、雲門大師から四代目の方で、雲門の弟子が香林、香林の弟子が智門、智門の弟子が雪竇であります。——雪竇禪師、諱は重顯、重顯と云ふのは、重ねて顯はる、と云ふこと。此名に就き雲門禪師の懸記があります（豫言のことであります）。雲門識して「二百年後吾が道重ねて顯はれん、」と云はれました。其懸記の如く雪竇禪師に至つて、雲門大師の佛法が重ねて顯はれました。雪竇は山の名、七十三にして遷化、明覺と謚すことがあります。

此碧巖集に四家の頌と云ふことがあります。第一が雪竇、其

次が投子、其次が丹霞、其次が天童でありますさうな。

碧巖と云ふ文字は、澧州の夾山に靈泉院と云ふ寺があり、其寺の方丈の額に、碧巖と云ふ二字が書いてあります。其下に於て圓悟禪師が雪竇頌古せつこうじゆに評唱を加へられて碧巖録と云ふ名がついたのであります。

圓悟禪師は、臨濟十世の孫にして五祖法演禪師に法を嗣がれました。名は克勤、字は無著、賜號は佛果であります。七十三にして圓寂、照覺と謚すがあります。碧巖録を焼却なされた大惠禪師は、勅號普賢、宋代の人であります。門下の禪僧が徒らに文字說話に没頭して、實參實究を閑却する、それを憤慨して

一炬に附してしまはれました、ご聞いて居ります。

諸君は既に御承知のこゝ、思ひますが、念の爲に一言申し添へて置きます。私は、新潟縣長岡市の出生であります。故に國ナマリが今に存在して居ります。尙ほ其上、規則正しき學問を致しません、所謂、乞食學問でありますから、かなを書けば、かながまちがひ、漢字を書けば烏焉馬となり、熟言熟字は自己流で、總てが錯を以て錯につき、錯で徹底して居ります。故に私の提講をお聴きくださるお人も、又提講録をお読みくださるお人も、右の事柄を充分お含みの上、御判讀、御判聽の義、伏して願ひ上げます。――

愈々碧巖録の提講にかゝります。碧巖録は禪家七部の中に於て第一に數へ、特に禪家虎の卷として賞翫されて居ります。されど、門外の人には必ず賞翫さるゝこきまつてはをりませぬ。「君子は義に悟り、小人は利に悟る」と云ふことがあります。「蛇の呑む水は毒となり、牛の呑む水は乳となる」と云ふこともあります。」

碧巖録の如きも、讀む人、見る人、用ゆる人、その人その人の力に依り龍ごもなれば蚯蚓ごもなり、又は毒ごもなれば薬ごもなります。迷をして更に迷を重ぬる道具ごもなれば、悟りを、いで轉た悟りを得せしむる方便ごもなります。

私如き者が碧巖録を提講しましたら、碧巖録は如何になりませう。それは、聽いて後のここ、見て後のここ。雨か、晴か、——將亦嵐か、——海嘯か、——地震か、——逆じめ申し上げられません。申し上げない方がお楽しみでありませう。——

### 第一則 聖諦第一義

#### ◎垂示

垂示云、隔山見煙、早知是火、隔牆見角、便知是牛、  
 舉一明三、目機鉢兩、是衲僧家尋常茶飯、  
 至於截斷衆流、東湧西沒、逆順縱橫、與奪自在、正當恁麼時、

且道是什麼人行履處、看取雪竇葛藤、

#### 讀方

垂示に云く、山を隔て、煙を見ては、早く是れ火なることを知り、牆を隔て、角を見ては、便ち是れ牛なることを知る。舉一明三、目機鉢兩、是れ衲僧家尋常の茶飯、衆流を截斷するに至つては、東湧西沒、逆順縱橫、與奪自在、正當恁麼の時、且く道へ、是れ什麼人の行履の處ぞ、雪竇の葛藤を看取せよ。」  
 (茲に一言申し添へて置きます。垂示及び本則並に頌、——それらの中にあります文字や出處の來歴を一々説明致すべきであります。只今は一切省略して單に大體の意味だけ

お耳に入れます。)(以下も同様)

以上の垂示は、佛果圓悟禪師が會下の大衆に向つての御教訓、それを私が圓悟禪師に代つて申し上げます。無論代人でありま  
すから、圓悟禪師と大なる相違のあることは御承知を願ひます。  
曰く煙を見て火のあることを知り、角を見て牛の居ることを知  
る位のことは、生れながらの盲人か、極めて念人の愚人でない  
限りは、十人が十人、百人が百人、別段思慮を用ひずして承知  
するここが出来ます。されど、擧一明三、目機銖兩に至つては、  
聊か處ではない大いに難中の大難事であります。其理由は、一  
を擧げて未だ擧げざる十を直に承知をし、尺度を用ひずして長

短を明了に、——カン／＼を借らずして輕重を分明に、——  
するご云ふことは到底普通一般の人のなし得ざる處でありま  
す。然れども、長く其事に従事し、久しく其事に關係して居り  
ますれば、擧一明三、目機銖兩も思ふほど難事ではありませぬ。  
例しますれば、彼の大道易者が、來訪者、其人の面を一見する  
や、直に其人の憂慮のある處を見抜き、——茶屋の女將が、  
お客の舉動を一目して其人の貧富を即斷するご同一で、習慣の  
力は實に恐るべきものであります。尤も中には天性ご云うて生  
れつきもあります。それは極めて少數、多くは經驗の然らし  
むる處であります。故に右等のごは難事ご云へば難事であり

ますが、禪學修行者にこりては、所謂、朝飯前のお茶の子、否、それよりお易い事であります。

敢て禪學者に限りません。難事の中の大難事は衆流截斷それでありませぬ。衆流截斷ご申すことは、要するに見性悟道のことであります。苟も性を見、道を悟らんご欲するならば、三昧王三昧の力を以て、佛魔、迷悟、善悪、邪正、得失、是非、苦樂、大小、長短等の相對差別を、焙烙千枚に金てこ一挺、——積みなす氷に一箇の燒瓢、——それで斷じ、斷じ、盡し、それで拂ひ、拂ひ、盡して、更に拂ふべきなきを拂ひ、斷ずべきなきを斷じた。それが囚地一聲、それが見性悟道、それが衆流截斷

であります。此衆流截斷が確實であれば見性悟道も隨がつて確實、若し衆流截斷が不確實であれば、無論見性悟道も不確實であります。

禪學修行者にして大なる歡喜ご大なる自在を得ざるは衆流截斷の不確實なるがため、決して禪そのもの、罪ではありませぬ。——眞箇衆流截斷が確實に出來ますれば、諸佛の神通妙用は、そのまゝ衆流截斷者の神通であり妙用であります。其神通妙用の一斑が、東湧西没、逆順縦横、與奪自在、——云ひ換へれば平生の語默動靜、その總てが佛作ごなり佛行ごなります。——知るべし自己の外に佛なく、佛の外に自己なし、常

に恒に佛と自己と同坐同行同語黙でありしことを。その佛と自己と同坐同行同語黙の人は抑々何人であります。それは雪竇禪師が爲人度生の手を垂れて舉揚なされた本則がそれであります。苟も禪を修行せんと思ふ學者は採つて以て参考とし、體して以て研究すべきであります。

◎本則

舉、梁武帝、問達磨大師、如何是聖諦第一義、磨曰、廓然無聖、帝曰、對朕者誰、磨曰、不識、帝不契、達磨遂渡江至魏、帝後舉問誌公、誌公曰、陛下還識此人否、帝曰、不識、誌公曰、此是觀音大士、傳佛心

印、帝悔、遂遣使去請、誌公曰、莫道陛下發使去取、閩國人去他亦不回、

讀方

舉す。梁武帝、達磨大師に問ふ。「如何なるか是れ聖諦第一義。」磨曰く、「廓然無聖。」帝曰く、「朕に對する者は誰なるぞ。」磨曰く、「不識。」帝、契はず。達磨、遂に江を渡つて魏に至れり。帝、後に舉して誌公に問ふ。誌公曰く、「陛下、還この人を識れりや否や。」帝曰く、「不識。」誌公曰く、「此れは是れ觀音大士にして佛心印を傳ふるものなり。」帝悔いて、遂に使を遣はして、去つて請せしめんごす。誌公曰く、「道ふ

ここ莫かれ、陛下、使を發し、去つて取らしめんご。闔國の人去るごも他また回らざらん。」

以上は、本則であります。本則は雪竇禪師の作でも、圓悟禪師の作でもありません。古人の問答商量、法戦一場それであります。」武帝は佛教信者の熱心家、帝王たる其力を以て澤山の寺を建立し、多くの僧侶に供養し、其他種々の慈善事業をなされました。昔も今も同じことであります。眞箇大聖人に非ざる限りは、自己のなしたる善事、自己が手に入れたる學問、それが兎角鼻にかゝりて邪魔になるものであります。武帝も大聖人ではありません。故に自己のなした善事、自己の手に入れた佛教が

頗る邪魔になるものご見えます。其證據には達磨大師が印度より來着ご聞くや、即時宮中に屈請し、いの第一番に寺を建立したり僧侶に供養致しました。其功德は定めて大なるものでありませうごお問ひになりました。若し達磨大師でなければ、陛下は大なる慈善家であります、無論大なる功德があります、ごお世辭澤山に振りまくのでありませう。處が達磨大師は大乗禪の立場から無功德、功德なし、——ご一言下に武帝の妄想袋を寸斷されました。眞箇の禪學者であるならば痛快に感ずる處であります。然るに小乗に安住してをらる、武帝でありますから、大の不服、その大なる不服を醫せんが爲に、改めて然らば聖諦

第一義をお問ひ申すとおいでになつたのであります。

「如何、是聖諦第一義」——さすがは達磨大師、多端に渡らず多言を用ひず、「廓然無聖」と（一劍倚天寒）露堂々に聖諦第一義の端的を放出なされた處に、達磨大師の眞面目が拜見さるゝのであります。諸君拜見が出来ましたか。——格外的禪者から

見れば、達磨大師の廓然無聖も敢て奇特と申されません。廓然無聖と云ふだけ、それだけ痕跡がつき、それだけ汚點が残る、

——と云へば云ふ様なものゝ、即今聖諦第一義と問はゞ何と答へます。——武帝は一回滿面の慚惶を蒙りながら、こりもなく重ねて「對朕者誰」、と問ふは實に無慚愧の漢であると共に

無眼子の人であります。如何せん武帝は骨を折らず文字言句の上で易々、佛心宗の堂奥に登らうと思惟せらるゝ、それが抑々の錯誤であります。武帝、廓然無聖と聞くと、無聖と云ふ聖の字につき、朕が面前に御坐る尊者は佛心を傳へた聖者に非ずや、然るに無聖とは何事ぞ。——達磨大師間に髪を入れず大獅子吼して曰く「不識、」——しらぬ。——此不識に對して古往今來、幾多の禪學者心血をしばり競うて、その人その人それ相應に見解を下して居ります。眞實達磨大師の意に契かたふや、否は別問題であります。或人は不識は廓然無聖の再來、再來半文錢に當らず、と云うて居ります。多少の味はありますが當らず當ら



ずであります。

武帝は廓然無聖すら未解決、不識の二字容易に理解すべけんや、模索不着、如何に當てつ、くらべつしても武帝には了悟は出來ません。故に帝契かたはず、ご書いてあります。小乗佛教信者の武帝に達磨大師の不識がお手輕に解得が出来るならば、それは眞箇の正禪ではありません。「不契」でこそ武帝も武帝の眞面目を失はず、達磨も達磨の眞面目を保ち得たご云ふべきであります。諸君は如何に思ひますか、私は以上申し上げた通りであります。「達磨大師は般若多羅尊者の下で既に衆流を截斷なされたお人であります。故に山を隔て、煙がごうの、牆を隔て、牛

がごうの、ご云ふ處に愚圖々々しては居りません。舉一明三、目機銖兩も何のその東湧西没、逆順縦横の活作略を以て徹頭徹尾、行住坐臥、動靜云爲、なされます。其一斑が廓然無聖ご顯はれ、不識ご現じ觸處觸處に於て光焰萬丈、人をして近傍するごご能はざらしむ。——可謂大人ご。」達磨大師は支那に大乘の機根を具する學者ありご信じ、喜んで渡來なされしに豈に圖らんや恁麼いんもの小乗信者の武帝に逢着するごは意外も意外、大なる意外であつたごご、察せられます。されご是を手がかりにしごて嵩山少林寺に於て面壁九年、なし得たるごごは是ぞ意外の大幸であります。是あるが爲に、一華五葉も開き、皮肉骨髓の分

法が出来たのであります。荆棘を生じたこと云へば荆棘を生じた様なものゝ、兎に角、一場の懺悔たることを、達磨大師は逃れ得たこと云ふべきであります。

武帝は達磨大師と充分意見を交換せずして分袖なされたことが如何にも残念である處から、武帝おなじみの誌公に自己の意中を、これくかくかく、ご委細を語られました。(今ごなつては賊後の弓、火災後の用心、無駄ごごであります。)するご誌公曰く、陛下は、ごうの昔に達磨大師の本體を御承知のごご、思うて居りました、ご鈎をかけました。——武帝曰く不識、本當に知らぬ。——文字の上は、達磨の不識ご武帝の不識ご同

一でありますが、意味に於ては無論、天地懸かに隔れりでありませぬ。所謂、似たることは似たり、是なることは是ならず。——されご彼の不識ご此不識ご、達磨大師ご武帝ご期せずして不識ご唱へた不識、——そのものから見るご人の性はもご一なりご云ふごごが察知せられます。——誌公曰く、實際御承知なくば申し上げませう。先日參殿なされましたアノ達磨大師は、陛下の常に信仰しておいでになります觀世音菩薩が、佛の衣鉢を傳へて特に陛下の爲に御光來になつたのであります。何ご有難いことではありませんか、ご誌公一流の活作略を用ひて武帝の渴仰心を一層おだて上げました。誌公の即今禪の活用は實に

玄であり妙である。——果然武帝は誌公の口頭に翻弄され、さうか、さうごは知らなかつた、それは残念々々、——観世音菩薩ご聞いては捨ておかれぬ、何事を差し措いても是非御迎へ申し上げたい。誌公、何ごか策はあるまいか、「帝悔遂遣使去請」——ご。誌公曰く、外の人であるなら、いざ知らず、アノ達磨大師に限り御迎への使者を遣はしても到底お出でにはなりません、ご。誌公自己の胸中を以て達磨大師の胸中を忖度するごは少々越權であります。——陛下は帝王の力を以て屈請したならばご思ひなさるであります、それは断念なさい。今改めて御迎への使者でもお出しなさるご、それこそ重々の慚惶であります。

御断念、御断念、断念の、三十棒を武帝に與へましたは、徳山禪師に勝る棒使ひの大先であります。——されど誌公自身は、恁麼の痕跡を昭和の今日迄留めて末世の人々に迷惑をかけようごは夢にも思はざりしならむ。——

◎頌

聖諦廓然、何當辨的、對朕者誰、還云不識、因茲暗渡江、豈免生荆棘、闔國人追不再來、千古萬古空相憶、休相憶、清風匝地有何極、師顧視左右云這裏還有祖師麼、自云有、喚來與老僧洗脚

讀方

聖諦廓然、何ぞ當に的を辨すべき。朕に對する者は誰ぞ。還云く、不識。茲に因つて、暗に江を渡る。豈に荆棘を生ずることを免れんや。闔國の人、追ふとも再び來らず。千古萬古、空しく相憶ふ。相憶ふことを休めよ、清風匝地、何の極りか有らん。師左右を顧視して云く、這裏還祖師有りや。自ら云く、有り、喚び來れ老僧が與めに洗脚せしめん。」

以上は雪竇禪師の頌、提講左の如し。

「聖諦廓然何當辨的、」是は武帝か、——是は達磨か。——武帝にしては第一義の三字がたりぬ、達磨にしては無聖の二字が不足だ、さすれば達磨に非ず武帝に非ず。されど武帝に非ず

れば聖諦第一義を問はず、達磨に非ざれば廓然無聖と答へず、聖諦廓然と云へば武帝のことにして又達磨のことに。即達磨の端的にして、即武帝の端的、而して雪竇そのもの、端的、私の端的にもなります。——誰か辨得ず、恁麼の端的底を、——容易に辨じられません。——眞箇恁麼の端的を辨ぜん、欲せば、親しく武帝及び達磨、雪竇に、歴參なさるべし。然らざれば、去つて、天邊の月にお問ひなさい。——

以上の二句で本則の眼目は既に頌じ了れり。——以下は蛇足であります。武帝は廓然無聖の語脈に轉換され、極めて拙なる問を發して曰く、「對朕者誰。」武帝としては斯くあるべきで

あります。昭和の今日佛教國の大日本に佛教信者の大家として世人に讚賞せらるゝお人の中にも、語脈裏や文字上に轉換せらるゝ者が少くありません。此點は古今東西同一であります。

達磨大師は武帝の愚問に對して親切に「不識」と木で鼻をこすられた。それを雪竇禪師は、「還云不識」と頌じられた。不識の二字、是ぞ達磨大師の涙であります。諸君お分りか。——悲しい哉武帝には不識が徹底せざるのみか却つて達磨大師を恨みまじたことでありませう。達磨大師は多少の恨を買ふことは元より承知、故に涙を吞んで、斷ずべきに臨み、決然斷ぜられたは、達磨大師の達磨大師たる價值のある處であります。現代の偽高僧

は、官員様と看れば文句なしに平身低頭、——達磨大師の兒孫たる熱血何れの處にありや、と試みに問うて、見たい様な氣が致します。」

達磨大師は武帝と法戦一場、意氣投合せず。止むなく嵩山少林寺へ遁走なさるゝ其時の様子は定めて可憐な敗將軍でありしこと、思はれます。嵩山少林寺の九年面壁、是が所謂、一家事あれば百家忙しで、禍の元ともなり福の源ともなります。「生荆棘」と云へば生荆棘でありますが、生旃檀と云へば生旃檀であります。——必ずしも達磨大師が荆棘を生じたと達磨大師に責任を負はすることは無理も無理、大なる無理であります。何事

でも其人其人の力如何に依りて禍ごも福ごも、吉ごも凶ごもな  
ります。武帝一時、達磨大師の禪的一流の不人情きはまる應對  
に多少の恨みはありしものゝ、分れて見れば何ごなく思ひ慕ふ  
心の切なるを誌公見て取り、陛下、先日お召に應じて參上致し  
ました。アノ僧侶は如何なる者であるかを御存知でありますか、  
若し御存知なければ申上げませう。アレは陛下の常に御信仰あ  
そばさる觀世音菩薩が假に僧侶の風彩をしてお出でになつたの  
であります。——武帝は觀世音菩薩ご聞いて、たまらない、——  
如何に手数がかゝらうご、如何に大金がかゝらうご、是非是非ご  
はやる。それに對して誌公曰く、およしなさいおよしなさい。

陛下が陛下の全力を盡し全國總動員で、お迎へになりましても  
「不再來」でお出でにはなりません。「千古萬古空相憶」で如何  
に思ひ慕うても徒らに思ひ慕ふのみで實際無駄であります、ご  
申し上げて、陛下に於ては、あきらめがつかません。それも  
道理であります。されど心を翻然ご一轉して御覽なさい。「清風  
匝地有、何極」で達磨大師は決して嵩山少林寺にはかり隱退して  
は居られません。清風明月は人間の到る處にあるが如く、達磨  
大師は隨處隨時に、それそこに、これここに、澤山あります。  
若し御不審ご思ひなさるならば達磨大師を呼び出して、お目  
にかけませう。——コラ、誰か居らぬか、居るなら一寸來

てくれ。お茶一椀頂戴。——敢て洗脚してもらはなくもよろしい。——諸君は目下達磨大師は、ここにござうして居ると思ひます。不離當處常湛然、——それそこに。

(以上昭和十一年五月九日講演)

第二則 趙州至道無難

平常心、是道。——お互が毎日毎日至誠の心を以て喫茶喫飯、坐作進退なしつゝある、それが至道であり大道であり妙道である。若し此外に至道あり大道あり妙道ありと思はば、それは邪道にして魔道、偽道にして悪道であります。諸君、信ずる能はざれば趙州禪師の提唱を拜聴なさるべし。——

◎垂示

垂示云、乾坤窄、日月星辰一時黑、直饒棒如雨點喝似雷奔、也未當得向上宗乘中事、設使三世諸佛只可自知、歷代祖師全提不起、一大藏教詮注不及、明眼

納僧自救不了、到這裏作麼生請益、道箇佛字、拖泥帶水、道箇禪字、滿面慚惶、久參上士不待言之、後學初機直須究取、

## 讀方

垂示に云く、乾坤窄く、日月星辰一時に黒し、眞饒棒は雨點の如く、喝は雷奔に似たりとも、也未だ向上宗乗中の事に當得せず、設使三世の諸佛たりとも、只自知すべし、(たごひ)歴代の祖師たりとも全提不起、(たごひ)一大藏教たりとも詮注不及、(たごひ)明眼の納僧たりとも自救不了。」這裏に到つて作麼生か請益せん。箇の佛の字を道ふも、拖泥帶水、箇

の禪の字を道ふも、滿面の慚惶、久參の上士は之を言ふことを待たず、後學の初機は直ちに須らく究取すべし。

以上は圓悟禪師が本則に對する垂示、心して讀むべし、心を清めてお聞きなさい。

お互は乾坤、そのものは實に廣大なるもの、如何なるものも乾坤より廣大なるものなし。」お互は日月星辰、そのものは實に清明なるもの、如何なるものも日月星辰より清明なるものなし、ご信じて居ります。處が然らずであります。禪そのもの、本體、本領、本分、是を假に名づけて向上宗乗中の事云うて居ります。言を換へて云へば眞理、又は大道であります。其向



上宗乗中の事は、その廣大を語れば、乾坤の廣大より更に廣大、その清明を論ずれば、日月星辰の清明より更に清明であります。故に禪そのもの、面前に來れば、如何に廣大無邊なる乾坤も忽ち其廣大無邊を失ひ、如何に清明なる日月星辰も其清明を失ひます。」

禪家には大法を擧揚する道具は澤山あります。就中有名なもののは棒と喝とであります。其棒と喝とを用ゆれば、如何なる大道でも易々拈出ねんしゅつするここが出来ます。然るに向上宗乗中の事、そのものに至つては、棒を振るここ、朝打三千、暮打八百しても、喝を叫ぶここ百千萬億しても向上宗乗中の事には遠くして遠し。

—— お月様に投石、—— ごとくごきません。——

但し眞箇徳山禪師の棒、臨濟禪師の喝であるならば、或は當らずと雖ごも遠からずと云ふ處まで、ごごくかも知れません。普通の禪僧では、如何に全力を盡して棒を振ひ、如何に骨を折つて喝を吐いても到底及びもなきことであります。」

されご三世の諸佛なれば、歴代の祖師なれば、一大藏教なれば、如何に向上宗乗中の事と雖ごも、無論朝飯前のお茶の子で、輕易に説明するここも、全部拈出するここも、悉く注解するここも出来ることと思ひませう。それが抑々の錯誤で、三世の諸佛と雖ごも倒退三千、—— 歴代の祖師と雖ごも一毫も動かす

能はず、——一大藏教と雖ども言語の下し様がありません。

——かゝる向上宗乗中の事は、明眼みやうげんの衲僧のうそうも、人も許し自分も許す現代著名のお人でも事實自救じく不了りょうであります。(自救不了ご云ふことは、この場合に限り、自分自身が安心出来ぬご云ふことではありません。自分自身そのもの、それ自身が向上宗乗中の事に、なりきつて居る其時の端的底は、所謂、超絶對でありますから自分自身も知らぬご云ふ意味であります。)況んや他人に向つて、向上宗乗中の事は、ごうの、ごうのご云へば云ふだけ、それだけ、岐路に入り、それだけ、うそになります。

佛ご云ふたら當るか、——禪ご云ふたら、ごうか、——

禪ご云ふだけ玉にきず、——佛ご云ふだけ鏡に塵、——失

敗の上の大失敗、——錯の上の大錯、——多年此事に心血

を濺いで居る久參底の修行者には、今更婆言を呈しなくとも、

昔の昔の大昔に御承知のことでありませうが、併し新たに發心して禪に志し、修行をしようごなさる後學初機の人には、禪の講釋本を見たり、禪の提唱を聴いたりして、それで向上宗乗中の事を手に入れようなぞご思ふは、南に面して北斗を見るよりも、大なる方角違ひであります。諸君の中にも方角違ひをしてをらるゝお人はありませんか、なければ何よりであります。——

苟も向上宗乗中の事を徹見せんご欲せば、先づ以て擇法眼を開

き正師家を見出し、其門下に入り悪毒の手段、法令親なしと云ふ棒喝を受け、一意専心、三昧王三昧になりきる、それが第一番の近路であります。その近路の案内が左に擧揚してある趙州至道無難、それでありませぬ。

經に、初發心辨成正覺と云うてあります。故に初發心の時が一番大切であります。敢て禪の修行に限つては居りませぬ。禪は殊更に始めを大切に致します。所謂一處透れば千處萬處一時に透り、一機明かなれば千機萬機一時に明かなりと云ふことは、見性確實なる證明語であります。世に論語讀みの論語知らずと云ふことがあります。禪に於て最初の一步が不確實であること、

一千七百則の公案は無論のこと無量無數の公案を悉く透過しても只之是等の人で、——衣架飯糞、——糞造器たるを免れません。初學の人、特に御注意。

### ◎本則

擧、趙州示衆云、至道無難、唯嫌揀擇、纔有語言、是揀擇、是明白、老僧不在明白裏、是汝還護惜也無、時有僧問、既不在明白裏、護惜箇什麼、州云、我亦不知、僧云、和尚既不知、爲什麼却道不在明白裏、州云、問事即得、禮拜了退、

### 讀方

舉す、趙州、衆に示して云く、「至道は無難、唯揀擇を嫌ふ、  
 纔に語言有らば、是れ揀擇、是れ明白、老僧は明白裏に在ら  
 ず、是れ汝還つて護惜するや也無しや。」時に僧有り問ふ「既  
 に明白裏に在らずんば、箇の什麼をか護惜せんや。」州云く、  
 「我も亦知らず。」僧云く、「和尚既に知らず、什麼ごしてか却  
 つて明白裏に在らずと道ふや。」州云く「事を問ふことは即ち  
 得たり、禮拜し了つて退け。」

本則の主人公、趙州從諗禪師は、碧巖錄百則の中、十二回出  
 てをられます。故に簡単に趙州禪師の履歴を申し述べて措きま  
 せう。諸君は無論御承知のここ、は思ひますが、老婆の婆言ご

お笑ひつゝお聞きください。」

元古佛が、稽首趙州眞古佛、趙州已前無趙州、趙州已後無  
 趙州、「ご云はれましたを見ても趙州禪師の超宗越格なりし人  
 たるここが明白であります。禪師が南泉禪師と問答して弟子ご  
 なられしここは略します。南泉禪師に隨侍するここ四十餘年ご  
 あります。實に驚き入る大乘根機であります。(私などは何をや  
 つても三日坊主、成功しないのは理の當然であります。)六十歳  
 から更に他流試合に出られました。其時の誓願でありますか、  
 已前よりの發願でありますか、確實の處は私にはわかりません。  
 其願文に曰く、我より勝る者あらば三尺の童子と雖ごも飲んで

學ばん、我より劣る者あらば百歳の老人と雖も喜んで教へん、  
 ござあります。趙州禪師の趙州禪師たる面目、茲に於て見るこ  
 が出來ます。八十歳迄、二十年間諸方を歴參なされ、八十歳よ  
 り四十一年、一日の如く拖泥帶水、灰頭土面、なされました。  
 趙州禪師の特に有名の點は、唇皮禪であります。唇皮禪と云ふ  
 は讀んで字の如く、口舌の禪と云ふことで、德山禪師の如く棒  
 を振らず、臨濟禪師の如く喝を吐かずして、唇皮、口舌で棒以  
 上の活說法を行じ、喝以外の活作略をなさる。其一例を拈出し  
 ますれば、一字關の無字の如き、——平易なる喫茶去の如き  
 が、それであります。故に禪宗史上に於て拔群の大異彩を放つ

て居ります。」

本則に出て居ります至道無難云々、それにつき一言申し添へ  
 て置きませう。

達磨大師から三代目の祖師鑑智禪師の吟出なされた、「信心  
 銘」、と云ふに出て居ります。「信心銘」、は四言對の韻文長篇で  
 七十三對、字數は五百八十四、至道無難、唯嫌揀擇より始まり、  
 信心不二、不二信心、言語道斷、古來非今、」で終つて居ります。  
 此信心銘を拜見致しますれば、鑑智禪師の學問にも禪にも、人  
 一倍の達人であること云ふことが分明になります。苟も禪宗に籍  
 を置く僧侶は無論のこと、普通のお人でも禪に心を注がるゝな

らば是非とも一回は拜讀すべきであります。趙州禪師の如きも愛讀者の御一人であります。」

是より本則の本文につき、私の胸中を申し上げます。唇皮禪の開山、趙州從諗禪師が會下の大衆に示さるゝ至道無難の則が、此碧巖錄中に、第二則、第五十七則、第五十八則、第五十九則と前後四則あります。是等の四則が即一則、一則が即四則であります。故に修行なさるお方は必ず四則を比較研究せざるべからずであります。然らざれば至道其ものゝ本體が明白になりません。——「至道無難、唯嫌揀擇」申すまでもありません三祖禪師、信心銘の句であります。それを趙州禪師が三祖禪師の口

まねをしたと云へば云ふやうなものゝ、三祖禪師の至道無難は三祖禪師の至道無難にして、趙州禪師の至道無難は、趙州禪師の至道無難、決して同じものではありません。若し三祖禪師の至道無難が、そのまゝ趙州禪師の至道無難であるならば、それは眞の至道無難でなくして偽の至道無難であります。所謂、一回舉着すれば一回新たなり、と云ふ處に眞箇の至道無難があります。故に即今私が至道無難と云へば、その字面と、その言句は古人の云はれし至道無難と同一でありましても、至道そのものゝ端的に至つては全然別であります。知るべし至道は處々眞、處々眞であることを。

此至道につき、「平常心是道」——「道は須臾も離るべからず  
離るべきは道にあらず。」——「大道透長安」——又は「牆  
外底」——「我道一もつて是を貫く」なぞご一々數へますれ  
ば澤山あります。要するに如何なるものも至道そのものを離る  
ゝことは出来ません。至道そのものを離るれば、悉く死物にな  
つてしまひます。死物になつても或意味に於て至道は離れませ  
ん。強ひて云へば至道に全部ご部分があります。其全部は三世  
の諸佛も歴代の祖師も一代藏教も、如何ごもなす能はず。され  
ご其部分は、私如き極めて愚鈍、至つて拙劣なる者でも説明す  
るごごも提起するごごも書寫するごごも出来します。」

至道ご云ふものを多くのお人は、頗る難重なものご思惟して  
おいでの様であります。至道は決して、むづかしい者ではあり  
ません。むづかしくないものが、むづかしくなるのは、揀擇、え  
らび、えらぶ、それがよろしくありません。揀擇さへなさらな  
ければ、總てが至道、一切が至道、——至道堆中に云爲動靜  
して居るのであります。否、居るのではありません、云爲動靜、  
そのまゝが至道そのものであります。處が纔に思慮を動かし言  
語に渡れば、善に非ざれば悪、是に非ざれば非、愛に非ざれば  
憎、迷に非ざれば悟、ご云ふ様に差別に流るゝか、平等に落ち  
るか、流れたり落ちたりするのが世間の人の有様であります。

苟も向上宗乗中の事を修行する者は、差別に流れても不可、平等に落ちても不可、趙州禪師の如きは、差別に流れて居らぬ、共に平等にも落ちては居りません。趙州禪師曰く、ごうだ多くの人の中には平等と云ふ悟りを大切に護惜して居りはせぬか、迷は元より、悟りでも大切に護惜して居れば、迷と同じ、寧ろそれより以上の害になり邪魔になるぞ、と示さる、お言葉を聞いて、一僧あり大衆の中より躍り出て曰く、「既不在明白裏護惜箇什麼」、悟りの處にも居らんごすれば、護惜する者は、ないではありませんか、それに汝還つて護惜するや也また無しや、と云はるゝが一體何のことであります。意味が充分徹底して居りません

ご自己の愚頭を顧みず、罪を趙州禪師に回轉しました。他の大善智識であるならば無論、此大馬鹿者めがご大喝一聲ご共に三十棒はたしかであります。——趙州禪師は、さすが唇皮禪の開山だけあつて、棒も振りません、喝も下しません。泰然ごして曰く、「我亦不知」、揀擇は元より明白も知らぬ。——茲に至道の無難底がビチ／＼躍り出て居ります。お互は、それを見て取らねばなりません。然るに問者僧、趙州禪師の言葉尻について亦しても理窟を持ち出し、僧曰く、「和尚既不知、爲什麼却道不在明白裏」、今更不知と云うて、不知ではすみません。先に老僧明白裏に在らずご、大口を叩かれたではありませんか。



禪師ともあらうお人が、前後不調の言語を吐かるゝとは、  
 頗る其意を得ません、ご白刃をかざして驀進して來ました。  
 戦争の場敷を澤山に經過なされた老將軍、更に驚かず微笑しな  
 がら曰く、「問事即得禮拜了退、」貴僧はなかくの辯者だ理窟  
 を云ふことは十分お手に入つた者だ。併し問うてしまつたら禮  
 拜して自己のお席へお歸り、なが居は無用、事終らば速に去る  
 べし、——ご古人も注意して居らるゝぞ。——世間には用  
 談が終つても雑談に花を咲かして長尻をする人がありますが、  
 甚だ宜しくありません。用談がすむと速に去るゝ、去らぬとで、  
 其人の大小と智愚とが一見に見透されます。お互に注意すべき

ここにあります。趙州禪師は問僧の徒らに質問に熱心して退却  
 の時機を忘れたるを見て氣の毒に思ひ、用事がすんだら首をさ  
 げてお歸りお歸り、ご子供の手を執り老先生が道を教ゆるご同  
 じ様になされました。それが、そのまゝ、至道の端的、無難の極致  
 であることを知る人ぞ知るであります。——諸君、至道無難  
 の様子が多少お手に入りましたか。

## ◎ 頌

至道無難、言端語端、一有<sub>二</sub>多種、二無<sub>三</sub>兩般、天際日  
 上月下、檻前山深水寒、鬪<sub>二</sub>體識盡喜何立、枯木龍吟  
 銷未乾、難難、揀擇明白君自看」

至道無難、言端語端、一に多種有り、二に兩般無し。天際には日上り月下り、檻前には山深く水寒し。鬪饑、識盡きて喜何ぞ立らん。枯木、龍吟ず、銷するも未だ乾かず。難々、揀擇明白君自ら看よ。」

至道無難と雪竇禪師、例に依つて本則そのまゝの丸出し、——聞きたびに珍しけりや杜宇、で聞きたびごとに耳新しく聞えます。」諸君、ごうであります。道には種々の異名があります。大道、妙道、玄道、靈道、其他まだ澤山あります。要するに眞の道は、至道それ一つであります。所謂、古今二路なし、達者

同じく涅槃の道に遊ぶ。——決して多岐多端な者ではありません。而して至道は、直きここに於ては髪より直く、平なるここに於ては砥より平であります。——お互が毎日毎日喫茶喫飯、動靜云爲、そのまゝが即至道であることを知らずして、彼れか是れか、ご東に迷ひ西に迷ふ。故に趙州禪師は「纔に語言あれば是揀擇、是明白。」と御注意なされた。聞く差別を外にして平等なく、平等を外にして差別なし、差別即平等、平等即差別。此道理より推しますれば、語言即至道、至道即語言、揀擇即至道、至道即揀擇、明白即至道、至道即明白、——宇宙の全體、天地そつくり、時間も空間も、人も境も有形も無形も、

至道、至道、至道の外に、一物もなし。

若し恁麼を疑はゞ活眼を豁開して御覽なさい。日が上れば月が下る、月が下るご日が上る。——山が高いご川が低い、川が低いご山が高い。——それが至道の面目にして、至道の端的、——わかりましたか、わかりませねば更に老婆の臭口を弄しませう。

日の上る必ずしも上るに非ず、月の下る必ずしも下るに非ず。——下るは上るに對し、上るは下るに對してゞあります。山の高きは必ずしも高きに非ず、川の低きは必ずしも低きに非ず。低きは高きに對し、高きは低きに對してゞあります。元より上

る下る、高い低いご二體あるに非ず。一にして二、二にして一、一ごは何ぞ。その時、そのものになりきる、それそれが至道であります。鬮體が笑つて居る、——枯木に花が咲いて居るご云ふたら、普通のお人は斯く云ふ人を指して氣が違つて居るご思うて相手になさるまい。されど、心眼を開いた人は共鳴致します。——お互は生は生、死は死、別々な者ご思うて居りますが、實は然らず。生必ずしも生に非ず、死必ずしも死に非ず。死は生に對しての死にして、死そのものが生の外に別にあるに非ず。生は死に對しての生にして、生そのものが死の外に別にあるに非ず。故に生の時、徹底生となり、死の時、徹底死

こなる。それを生死の束縛を解脱したと云ふのであります。なんぞ至道ほど無難なものはありません。

さうは云ふものゝ至道は決して無難也ごきめられません。尤も至道の説明や至道の講釋は、一二年も佛教學を研究致しますれば、何人にも美事に出來ます。サテ、至道の面目玉を踏みつぶし、至道の頭腦を握り出すことになるご、それはそれは難々、大難、實以て容易なごごではありません。

—— 諸君、御承知の明代の大聖、王陽明は、「見聞覺知は外賊なり。情慾意識は内賊なり。只能く主人公、惺々不昧にして獨り中堂に坐する時は、即ち賊化して家人となる、」と云はれました。外賊たる見

聞覺知は、或は是を防ぎ、或は是を拂ひ、或は是を滅し得るご雖ごも、内賊たる情慾意識は、なかく手ぬるいごごでは、滅するごごころか、拂ふごごも防ぐごごも容易ではありません。容易でない内賊をして防がず拂はず滅せずして、是を歸化して家人となさしむるには、主人公惺々不昧にして、獨り中堂に坐する、と云ふことを愈々事實に躬行しようとなるご、難々と云ふより、外に言葉はありません。此内賊の爲に古聖賢は十年二十年、坐して坐することを忘れ、立つて立つことを忘れ、眠食を忘れ、寒暑を忘れ、惡戰苦闘、—— 雪辛霜苦、—— 血の涙、玉の汗で、—— 漸く我物になされたのであります。尤も大道體寛、

無難無易と云ふこともありませんから、其人の力如何に依りて難ともなり易ともなります。經に勇猛の衆生のためには成佛一念にあり。懈怠の衆生のためには涅槃三祇にわたるとあります。

——勇猛心ある人の面前には至道は極めて易々。——懈怠心ある人の面前には至道は至つて難々。——揀擇して至道に迷ふも、明白に至道を証得するも、佛の力を祈る勿れ、神の助を仰ぐ勿れ、お互が自分自身で自修自得自証すべきであります。

(以上昭和十一年五月二十三日講演)

### 第三則 馬祖日面佛月面佛

「迷故三界城 悟故十方空」——「夢裡明々有六趣」覺後空々無大千」以上は佛典にも祖錄にも、在々處々に出てをる句であります。意味は迷うて夢みるが故に三界もあれば大千もある。悟つて覺めれば十方も空なり大千もなし。」されど、知るべし空と云うても斷空頑空のなものなしと云ふ、それでなしと云ふこと。——

古人云く「我這裏無生死」之是が大千なし十方も又空なりと云ふ確證であります。「お互は、心境一如、物我不二」と云ふ處に透達し翻然再生し來つて、人の爲、國の爲、法の爲に、

七〇  
ならなければ、禪を學んでも、禪を修しても、總てに是無駄となり、  
ます。

◎垂示

垂示云、一機一境、一言一句、且圖有箇入處、好肉  
上剗瘡、成窠成窟、大用現前、不存軌則、且圖知有  
向上事、蓋天蓋地、又摸索不著、恁麼也得、不恁麼  
也得、太廉纖生、恁麼也不得、不恁麼也不得、太孤  
危生、不涉二途、如何即是、請試舉看」

讀方

垂示に云く、一機一境、一言一句、且箇の入處あることを

圖るも、好肉上に瘡を剗り、窠を成し窟と成る。」大用現前、  
軌則を存せず、且く向上の事有るを知らしめんことを圖る、  
蓋天蓋地又摸索不着。」恁麼も也得たり、不恁麼も也得たり、  
太廉纖生。」恁麼も也得ず、不恁麼も也得ず、太孤危生。」二  
途に涉らずして如何なるか即ち是なるぞ。」請ふ試みに舉す  
看よ。」

以上は圓悟禪師が馬大師不安の大物を、ひかへて措いての垂  
示であります。故に此垂示は垂示中の大物也と古人も云うて居  
られます。此垂示を學者風に五段に分けて提講致しませう。

第一段は、一機一境、一言一句、且圖有箇入處、好肉上剗瘡、

成、窠、成、窟、」是は中根機以下の禪學者に禪そのもの、入口を示したるものであります。

第二段は、大用現前、不存軌則、且圖知有向上事、蓋天蓋地、又摸索不着、」是は中根機以上の禪學者に禪そのもの、堂奥を舉揚したものであります。

第三段は、恁麼也得、不恁麼也得、太廉纖生、」是は禪そのもの、普通方面にして向下底で易き方、されど、必ず易きと確定してはなりません。

第四段は、恁麼也不得、不恁麼也不得、太孤危生、」是は禪そのもの、特別方面にして向上底で難き方、然れども、決して難

きものと迷うてはならぬ。

第五段は、不涉二途、如何即是、」以上の向上、向下、太廉纖生の隨波逐浪にも偏せず、太孤危生の銀山鐵壁にも偏せず、云ひ換へれば不即不離の當體、それは如何になすべきや。——別に面倒はありません。寒には寒、熱には熱、その外に、云ひ様もなければ思ひ様もありません。

圓悟禪師例に依り會下の禪學修行者に示して曰く、禪の全體、そのものを明瞭に指示することは實に難中の大難であります。到底禪そのもの、全體を完全無缺に表現することは及びもないこと。

昔より一指を豎てたり、一華を拈じたり、拂子を突出したり、柱杖を卓立したり、無と云ふたり、有と唱へたり、麻三斤、柏樹子、廓然無聖、前三々後三々、なぞと手を換へ品を換へ、指南をしてをらるゝが、要するに門を叩く瓦に非ざれば、月を示す指、小兒の泣きを止むる黄葉に過ぎません。

其故、如何となれば禪そのものゝ本體から云ひますれば、一機一境、一言一句が悉く禪そのものゝ好肉上に大なる瘡を刻りつけたもので、禪そのものゝ好肉が是が爲に滅茶々にされてしまひます。」禪學者その人に對する師家の手元から云へば、一機一境、一言一句で學者をして長夜の夢を醒めさせ併せて無繩

自縛の束縛を解き、大安樂大自在の境界を得せしめん爲になせしことが、却つて學者の不爲ふたふとなります。」無と示せば禪は無なりと、自分で無と云ふ窠窟を造り自分でのち中へ落ち入り、「有と示せば禪は有なりと、自分で有と云ふ窠窟を造り、自分でその中へ落ち入り、」喝と云へば喝に束縛せられ、露と云へば露に生擒され、無念無想と云へば、又それに、——三昧王三昧と云へば又それに、出したもの、示したものの、一々それに執着して、自分自身で、元來なき窠窟を殊更に製造して自分自身が墜落して窮屈な思をなしつつ、あるは實にお氣の毒千萬のことであります。罪の多少は師家にもありますが、學者その人が大



死、一番、大活現前せざる、其罪であります。

大用現前は、大死一番、大活再生したお人の活動であります。大用現と云へば、天地が顛覆するか、山岳が震動するかの如くに思惟なさるお人が多い様であります。それは其人のお心得違ひであります。

由來禪そのもの、本體には、定つた方角も、是ぞと云ふ形も影もありません。随がつて色も香も味もありません。——されど隨時隨處に色も香も、形も影も、臨機應變に、山とも、川とも、馬とも、牛とも、神とも、佛とも、鬼とも、蛇ともなります。ことは、實に自由自在であります。

大死一番、再活現前した、その人の平生底の、喫茶喫飯、語黙動靜、喜怒哀樂等が悉く、雷奔の喝となり、雨點の棒となり、天關を廻らす舉手となり、地軸を覆す投足となるのであります。試みに御覽なさい、天地自然の大用現前底を、天は高く地は低く、夏は暑く冬は寒く、柳は綠花は紅、——之是等は規則もなければ約束もありません。然れども規則あるが如く規則正しく、約束あるが如く約束を違はず、宇宙の大眞理は實に正々として且つ堂々たりであります。此正々堂々たる正大の氣は、是れにあつて彼れになし、昔にあつて今になし、と云ふ様な、部分的、一時的のものでなく、東西南北を問はず、古往今來を

論ぜず、ごごにも、いづくにも、**充滿**、——**充實**、——**充**  
 塞して居ります。禪はそれそれと同じく廣大無邊なものであ  
 ります。細い手を以て探りあてようの、みじかい足を以て踏み  
 止めようの、とてじ、たば、たしたからと云うて、如何ともなす可  
 からざるものであります。併しその一部分は手に取ることも足  
 で踏むことも敢て難きことはありません。寧ろ易いことであり  
 ます。

禪そのものは、一切時、一切處、それそれであります故に立  
 つも坐するも、行くも歸るも、起きるも寝るも、泣くも笑ふも、  
 禪、禪、禪、——禪ならざるなし、と與へて許すこともあり

ます。(思ふまいぞ思ふまいぞ禪ほご易き者はないと。)されど  
 禪そのものの全體は、一切時にも一切處にもないないない。故  
 に喝でも及ばん、棒でもとゞかん、無でも有でも、佛來でも祖  
 來でも、善來でも惡來でも、向上でも向下でも、打し打し打し  
 て決して許しません。奪ひ奪ひ奪ひ、彼をして自由の分なから  
 しめます。(思ふまいぞ禪ほご難きものはないと。)

畢竟するに禪は、易きに偏すべき者に非ず、難きに偏すべき者  
 に非ず。難きに偏すれば中根機以下の人を如何せん。——易  
 きに偏すれば中根機以上の人を如何せん。——敢て難易の中  
 を取らずして、觸處觸處、禪そのものの本體全部の活用底、如何

にせば是ならん。幸に馬大師の日面佛月面佛の本則がであります。各自進んで體得なさるべし。」――

◎本則

舉、馬大師不安、院主問、和尚近日尊候如何、大師曰、日面佛月面佛、

讀方

舉す。馬大師不安。院主問ふ、和尚近日尊候如何、と。大師曰く、日面佛月面佛。」

本則の主人公たる、馬大師は、興元四年正月、建昌の石門上に登り、林中の岩窟を指さし侍者に示して曰く、「我が朽質來月に

此地に還るべし、」と豫言して、翌二月一日に入寂、此岩窟に葬りし、と或本に出て居ります。」此則の馬大師不安は、ことによると入寂に近き正月頃のことであつたかも知れませんが。敢て馬大師に限つたことはありません。境界のお出来になつたお方は、自分で自分の死期が豫じめ分明にわかるものと見えます。あまり早くわかると、或はこまることもあります。凡人には、死期のわからぬのが何よりの幸であります。此馬大師は、我が禪宗に於て片時も忘るゝことの出来ぬ大徳の御一人であります。我が禪門の法燈は、一口に西天の四七、東土の二三と申します。印度では釋迦如來より達磨大師迄二十八代、支那では達

磨大師より惠能禪師迄六代、此間は、一器の水を一器に移すが如く、缺餘なく法脈が一糸亂れず嫡々嬌々相承して居ります。其様子を古句にて評しますれば、「四海波平龍睡穩、九天雲靜鶴飛高、」で性天と云ひ、法海と云ひ、一點の波瀾なく一片の雲翳なく、實に泰平であり平和でありました。然るに六祖門下に南岳、石頭の二英雄出現し、又南岳の下には馬祖大師出で、此馬大師は「馬駒踏殺天下人、」と云ふ豫言に符合し、八十餘人の善智識を叩き出されました。それが抑々禪海波瀾の元で、一波萬波の喩へに漏れず、五家、——七宗、——二十四流と流れ流れ、分れ分れました。それは禪宗歴史の話でありますから、他日に譲ります。

ます。

馬大師は、漢州、什邡縣の人、本邑羅漢寺に於て出家、容貌奇異、牛の如く行き、虎の如く視る、其舌を出せば鼻を過ぐと云ふ、—— 天然的奇人にして異人でありました。初め律を修め、後禪門に入る。衡岳山中に於て坐禪を行じて居られし時、偶然南岳讓和尚、此衡岳山中般若寺に錫を留め、山中に多年坐禪工夫して居る人のあることを聞き、一日其僧即馬大師を尋ねられました。和尚問うて曰く、大德坐禪をして甚麼を圖る、」と。馬大師曰く、「作佛を圖る。」和尚乃ち一片の瓢を取り彼が庵前の石上に於て是を磨す。馬大師怪しみ問ふ「磨して甚麼をかなす、」

と。和尚曰く、「磨して鏡となさん」と。馬曰く、「磨するも、甄、豈に鏡に成ることを得んや」と。和尚曰く、「甄既に鏡に成らずんば、坐禪豈に作佛を得んや。」馬大師多年に渡る坐禪の修行も茲に於て方に破れんとせしが、さすがの馬大師、問うて曰く、「如何んが即ち是なるか」と。和尚垂示して曰く、「牛に車を駕するが如し。車若し行かずんば車を打するが即ち是か、牛を打するが即ち是か。」何れを打つがよい。此垂示の下で馬大師省あり、南岳讓和尚を師として更に實參實悟して、馬大師と云ふ拔群の禪將になられましたとあります。

八十餘人の大善智識を叩き出された禪的英雄僧も、肉身を所持して居る以上は致し方はありません。大病にもかゝるし、死にも致します。それが當然であり、それが必然であります。」

或人は、禪宗の高僧は必ず長命するものと信じて居ります。然るに昨今は高僧と云はるゝお人、多く早死なさるゝは太だ不思議に思ひますと云はれます。」私は、さう云はるゝお人の意味が確實に分りません。何故なれば、禪宗の高僧だと云うて、石でもなければ、木でもありません。世の中の人と同じく、佛學上で云ふ四大和合の肉身、血もあれば、うみもあります。故に病氣もすれば、けがも致します。頓死もすれば、早死も致します。禪を修行したから必ず長生とは限りません。他宗派のお人

に比較すれば、或は禪宗の高僧には長壽が多かつたかも知れませんが。確實に必然的に禪宗の高僧は必ず長命する者ご断定するごことは出来ません。」

又或人は、苟も禪を修行した人ならば、怒るだの泣くだの、喜ぶだの悲しむだの、ご云ふごことはないであらう。——ア、レ、がすきだの、コレがいやだの、あゝもしたい、こうもしたい、杯と云ふごことは絶対的皆無であらうと深く思ひ堅く信じて御座るが、それは少々買ひかぶりであります。

私をして忌憚なく云はしむれば、以上のお考を所持なさるお人は、全然禪そのものゝ眞意義を夢にだも御存知なくして、禪

そのものを御自身一箇で、如是也ご獨斷しておいでなさるのであります。禪は決して世間ばなれや、人情外のものではありません。世間に能く密着し、人情に能く符合しなければ、眞箇の禪ではありません。」大悟十八遍、小悟其數を知らずご云ふ程、大悟徹底なされた大善智識でも、夏は暑いし冬は寒い、腹もすけば、咽もかわく、病氣もすれば死にも致します。正法に不思議なしであります。

是は秋野師の碧巖録で拜見したのであります。秋野師が曹洞宗高僧の一人たる西有禪師が赤痢にかゝられた時の話、西有禪師が重い赤痢で日に何十回ごなく下痢をなさる、交通遮断で醫

師や看護婦がつきつきり、そこへ見舞に行きますと、丁度お尻の下に便器を据ゑ盛んに禪師は下痢をしつゝ、本を讀んで居られました。見まするに随分熱が高い。そこで禪師、随分御重態の様でありますから、書見は一時お止めになつては如何、と申し上げました處が、禪師曰く「ナーニ、ひる方はひる方、見る方は見る方、」と云うて元の通り讀書しておいでになりました。是には拙僧、大いに恐れ入つたのであります、と云うてあります。「是等を禪の力と云へば、禪の力かも知れません。されど、必ずしも禪の力とする必要はありません。禪を修行した者は必ず病氣にかゝらぬと申されません。又必ず病氣に勝つとも申され

ません。馬大師は西有禪師の如く赤痢ではありません。云はゞそれより頗ぶる大病であつたことゝ見受けられます。院主和尚念入の御見舞、老大師御氣分は如何であります、大分御重態の様であります、總て病氣は靜養第一でありますから、萬事を抛ち安心して、お休みなさるが何よりであります、と申し上げました。」すると馬大師曰く、「日。面。佛。月。面。佛。」病氣にかゝつても別に大騒ぎするには及ばん、所謂、丘が祈ること久し。——されど、まだ死なぬ、誰でも死ぬのはいやなものさ。——之是の日面佛月面佛と口走る病氣は、四百四病の外か、四百四病の中か、無論四百四病の外も外も、ずつと離れた外であります。

病氣と云へば、病氣、病氣でないと言へば病氣でない。——  
 畢竟如何と云は、日面佛月面佛。——私はまだ曾て病氣らし  
 き病氣に罹つたことがあります。故に病中の感は一切ゼロで  
 あります。病氣は如何なる輕微なものでも、あまり好まじき者  
 でないさうであります。況んや方に死なんとする様な大病と  
 あつては、それはそれは苦痛も又格別なものでありませう。其  
 大なる苦痛に處して馬大師は日面佛月面佛、と云はれました。  
 その意旨は蓋し他人の知る處に非ず、馬大師のみ能く知る處で  
 あります。——

故實全師は、此日面佛月佛面は大火聚の如く近前すると喪身

失命、——砒礪狼毒の如く石に措けば石が碎ける、——文字言句  
 について廻つては馬大師の犢鼻褌きんも擔げん、と云うて居らるゝ  
 が果して然るや否やは、親しく實全師に問ふべしであります。

日面佛月面佛、それぞれ、そこに、日面佛月面佛、それだそれ  
 だ、大悟徹底なされたお人も死にたくはありません。——尤  
 も玉碎瓦全と云ふことがありますから、死すべき時には笑うて  
 死するも敢て不都合はありません。大病で死は目前に迫つて居  
 ても死にたくないのが人の情であります。

平生は死は歸なり杯と口では云ふものゝ、愈々死ななければ  
 ならぬと云ふ其時になると、誰でも嗚呼死にたくない死にたく



ない、都合が出来らなれば、一年ならずば半年でも、一ヶ月でも、三日でも、實際死にたくない。——それが本當、——禪學者の中には、死ぬることが禪の本分であるかの如く心得て、やゝともすれば、死と云うて死することが無上によいことゝ思つておいでになる偽禪學者があります。それは笑ふべし慙むべしであります。故大内君は人の將に死なんとする時に南無阿彌陀佛とか、南無妙法蓮華經とか唱ふることは聞いたが、未だ日面佛月面佛と云ふことは聞いたことがないと云うて居らるゝが、大内君としては御尤も千萬であります。——死苦に侵された時のうわごとが南無阿彌陀佛、——南無妙法蓮華經、——死に臨ん

で死苦に侵されつゝ、侵されない時の正語は、日面佛月面佛、——譯すれば嗚呼死にたうもない。——私なぞが如何に彼れ是れと云うても、日面佛月面佛の眞佛は出現致しません。眞佛が出現しなければ、日面佛月面佛の本體は拜めません。——果して然らば、日面佛月面佛は、馬大師に依つて拜見するより外に道はない。處が馬大師は昔の昔に死して今日は御不在、如何にすべきや。曰く他なし。自分自身に問うて、自分自身で答ふるのみ。曰く日面佛月面佛。——

## ◎頌

日面佛月面佛、五帝三皇是何物、二十年來曾苦辛、

爲君幾下蒼龍窟、屈堪述、明眼衲僧莫輕忽、

## 讀方

日面佛月面佛。五帝三皇是れ何物ぞ。二十年來、曾て苦辛し、君が爲に幾たびか蒼龍窟に下りぬ。屈、述ぶるに堪へたり。明眼の衲僧も、輕忽なること勿れ。」

日面佛、月面佛、五帝三皇は何物ぞ、「此二句で本則は既に頌じ了れりであります。——馬大師と日面佛月面佛と雪竇と三鏡相對して中心影像なし、と云ふ感があります。馬大師が日面佛月面佛か、日面佛月面佛が雪竇か、雪竇が馬大師か、玲瓏々々、八面玲瓏たりであります。——恁麼地より觀驗し來れば五帝

三皇は何物ぞ、日面佛月面佛は何物ぞ、と云ふより他に云ふ言葉なし。

元より日面佛も月面佛も、何れも有難い佛様、五帝も三皇も、何れも尊い王様、如何に有難い佛様でも、如何に尊い王様でも、向上宗乘から見る時は、宇宙の本體より評する日には、一文半文の價値もありません。所謂、一切の賢聖は電拂の如し。——夢幻泡影より更に夢幻泡影の感なき能はず、實際がさうであります。——然るに恁麼の道理に暗きお人は、禪僧と云ふものは無茶な暴言を弄する者だ。日面佛月面佛と佛様を呼び捨てにするだに失敬であるにもかゝらずは何物ぞと云ふに至

つては、是何物ぞと云ふ禪僧に向つて抑々君は何物ぞと云うてやりたい。

斯くの如き暴言を吐く其人、果して日面佛月面佛以上の道力ありや。五帝三皇以上の徳功ありや。常に日面佛月面佛の大恩を蒙りながら、五帝三皇の餘徳を頂きながら、其御恩を忘れ、其お徳を無視して、と云はるゝお人は、昔にも今にも澤山あります。それらのことは云はゞ枝葉でありますから、それは、それとして措きます。是より雪竇禪師の舊懷談に移ります。

雪竇禪師曰く、老僧もな、——此日面佛月面佛、そのもの、それを我がものにし、五帝三皇は何物ぞと云ふ大見識を公衆面

前に於て無遠慮に吐露する迄には、二十年の星霜を費した。

——而して其間の辛苦と云うたら、それはそれは知音底の人に向つてゝなければ、話しても到底本當にはすまい。又分る者ではない。——昔深草の少將は小野小町の爲めに九十九夜の修行を積み、——文覺上人は袈裟御前の爲めに永い間の勤苦せられたと云ふ。——老僧は、日面佛月面佛、——向上宗乗中の事、——此君の爲めに、深草の少將や、文覺上人の比に非ず、献身的、命からがら師家の爐竈に入るとは叩き出され、入るとは叩き出され、来る日も来る日も又しても又しても立つて居て立つたことを忘れ、坐して居て坐したことを忘れ、起き

て居て起きたことを忘れ、臥して居て臥したことを忘れ、食して居て食したことを忘れ、語つて居て語つたことを忘れ、晝か夜か、夜か晝か、生きて居るのか死んで居るのか、全然無我夢中。——蒼龍の窟に下つた數の方から云へば恒河の砂の數より多く、苦の方から云へば八寒八熱地獄の苦より更に苦しかつた。——屈、——屈、——屈、——堪述、何とも、かとも云ひ様がない。——されど今となつて見れば、其苦が樂の種でありました。苦なければ樂なし。苦の多きほど、それだけ樂も又多い。——雪竇禪師も月並の事柄を鼻高々と話さるゝ處を見ると、だいたい歯金が、ごうかして居りますぞと云うてやり

たい。——

看よ釋迦如來は雪山に於て十二年苦行なされました。其苦行の妙味は釋迦如來其人より外に知る者はありません。老僧の經て來た辛苦と、老僧の悟り得た妙處は老僧の外に釋迦如來でも達磨大師でも馬大師でも、とても知ることは出來ぬ。否、知ることを許しません。聞く釋迦如來も達磨大師も、今尙修行眞最中であり、と。況んや釋迦如來に及ばぬ、達磨大師に劣る其人に於てをや。たとひ、多少の見解、——若干の悟處ありと雖ごも、中途半途で腰を折る様なことでは、立枯禪に非ざれば、破大乘禪、何のやくにもたゝぬ、と。——實に然りであります。

抑々禪の海、禪の山、愈々入れば愈々深し、愈々登れば愈々高し、その高きも尋常の高きに非ず、その深きも尋常の深きに非ず、故に苟も禪の山に登らんとする人は、禪の海に入らんとする人は、登らば須らく其高きを極むべし。登りて其高きを極めざれば登らざると同じ。入らば須らく其深きを極むべし。入りて其深きを極めざれば入らざるに同じ。——

登るが如くにして、登らず、入るが如くにして、入らず、斯の如き人、古今を通じて、其數、實に僅少ならず、嘆亦嘆。——

特に禪の修行は、小を得て、足れりとなす勿れ。淺きに居して、深きを忘るゝ勿れ。低きに坐して、高きを無視する勿れ。雪竇禪

師老婆親切を有難く頂戴して、お互に修行致しませう。歳に老幼の差あり、職の高下の別ありと雖ごも、向上宗乗中の一大事は、同一鹽味、必ず味ふべし、必ず玩賞すべし。笑ふ勿れ曇華の老婆を。——

(以上昭和十一年六月十三日講演)

369  
301

昭和十二年三月十日印刷  
昭和十二年三月二十日發行

發行兼 佐々木四郎

東京市日本橋區室町二丁目一番地一  
三井合名會社內

發行所 東京市日本橋區室町二丁目一番地一  
三井合名會社考查課

終

